

◆水明インターネット句会◆

令和六年七月

(1)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
水遊足りてをさなの午睡かな 南よりモスラが来ます二重虹	湿りたる天地を抱く蟬時雨 曝涼や曾祖父の句に我的こと	力サブランカ香に醉はされ又も観て	字役のすててこ歩く昼餉時	里海の帰漁の船に夕凪げる	雨ひと夜たどる記憶や夏燕	引き波に沈んで浮いて羊草	睡蓮の葉に囮まれて花咲ける	厨に入る前のひと梳き明け易し	帰省子の椅子一つ足す夕餉かな	古稀過ぎて一�きつぶや夏の空	孫の寝てかたへに送る团扇風	火鍋の前にはハンカチーフの染み	妖艶なつや持つそれは新米だ	紫陽花は少年の歌ソの響き	冷索麵出汁まで啜る角の店	雨蛙跳ぶや乳飲みの吾子が這う	この頃のかき氷かな持て余す					

◆水明インター ネット句会◆

令和六年七月

(2)

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21		
炎昼や焼肉キムチホルモン屋	合歡の花文殊菩薩の睫かな	梅雨の城石垣濡れて静まりぬ	日陰置く席に片寄る電車かな	半夏生沖に白帆の見え隠れ	風鈴の音色誘ふ旅心	トライアルの補聴器ときに蝉時雨	初蝉の声ひそやかに延暦寺	遠き日の思ひ出匙に欠き氷	夏の風邪いつまで続く鬱気分	数式に苦戦のかの日走馬燈	杏ジャム煮詰めて雨の昼下り	始発駅白シャツずらリスマホ打つ	枇杷の実の熟れ時を知る鴉の眼	梅雨晴や幼な草萌ゆ檜皮屋根	風鈴の音色涼しむ京町家	炎天の踏切警報鳴り止まず	札の顔替はる七月三日かな	夜な夜なに雀蛾集ふ合歡の花	星涼し全集並ぶ夫の書架	◆水明インター ネット句会◆	令和六年七月

◆水明インターネット句会◆
令和六年七月

令和六年七月

(3)

◆水明インター ネット句会◆

令和六年七月

(4)

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	初浴衣なんだか少し男前 夏休み釣つた魚をバーべキュー	火に油注ぐ猛暑の焼き魚 行蔵は我がこと涼し南無大師	火に油注ぐ猛暑の焼き魚 行蔵は我がこと涼し南無大師	火に油注ぐ猛暑の焼き魚 行蔵は我がこと涼し南無大師	火に油注ぐ猛暑の焼き魚 行蔵は我がこと涼し南無大師

◆水明インターねつト句会◆
令和六年七月

令和六年七月

摹蛙無粹無愛想無賴漢

草笛や遠く手を振る毛馬堤

道端に青柿ひとつ上を見る

去年の葉を突き破り立つ花蓮

一列に人道橋渡る鳥の子

路傍にも色香愛でたき夏の花

老鶯や母屋出払ふ宮参り

水底ヘリテ貨落ちゆく遠い夏

甚平に着替へて起居の軽き力な

魔女いざや呪いのよみがけ汗を拭き

夏をとけ奈良湯にはい行場町

湯單の二 ハレハの青三 ハ

卷之二

卷之三

ざうざうニ義アハの堯シニユ一々

曲藝（コロ）で鳥を後に含藝單（コンガル）

袋がけ赤子のごとき青葡萄

草野球夏野に場外ホームラン

梅雨入りや洗濯物と我もいて

(5)

◆水明インターにて句会◆ 令和六年七月

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
梅雨入りや洗濯物と我もいて 草野球夏野に場外ホームラン 袋がけ赤子のごとき青葡萄 独奏（ソロ）で鳴き後に合奏蝉しぐれ	「やまおやじ」青葉掲げて仁王立ち ダンサーのミラー・ボールに光る汗 ぞろぞろと蟻A.I.の読むニュース 「やまおやじ」青葉掲げて仁王立ち 激戦のプールに波の静まらず 執着を洗ひ流せる夕立かな 夏をどり奈良漬にほふ宿場町 夏をどり奈良漬にほふ宿場町 魔女いるや呪いのような汗を拭き 甚平に着替へて起居の軽きかな 水底ヘリラ貨落ちゆく遠い夏 老鶯や母屋出払ふ宮参り 路傍にも色香愛でたき夏の花 一列に人道橋渡る鳥の子 去年の葉を突き破り立つ花蓮 道端に青柿ひとつ上を見る 草笛や遠く手を振る毛馬堤 墓蛙無粋無愛想無頬漢																		

◆水明インターネット句会◆

令和六年七月

(6)

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101
亡き母の愛でし白百合咲き初むる	昂然と海にそばだつ雲の峰	凌霄花や百年前の母生家	戸口にて冷氣と暑気が渦を巻き	照りかへす日射し眩しや蝉の声	ありますん2個目の俳句はありません	つひに吾男日傘の人となり	半夏生出さぬ文いる夫婦函	鶯草をこよなく愛でし妹遠く	白き道帰り麦茶を一気飲み	異邦人母も娘もサングラス	靴紐を結び炎暑の街中へ	花火消え運河に戻るネオンかな	世の性を背負つてででむし思案中	旧式の愛車の走りカブト虫	雨音にめざめ大輪百合の花	病葉や信のなからば国沈む	行行子止めさしたるあの台詞	初デート俯きかげんソーダ水	

◆水明インターねつト句会◆ 令和六年七月

令和六年七月

ピン札で払う丑の日初デート

キャンプの火消えて星降る上高地

ご飯よと母さんの声夕焼空

薔薇の前写真撮りあうメイド服

炎天のロボやギクシャク高速指示

おほなゐの迫りをるらし心太

J A の 帽 子 の 鎧 を 零 る る 夏 の 露

梅干しを頼りに終える酷暑の膳

きのふまで生きみし人や畢屋

友から山の絵手紙風涼し

夏山にヤ・ホウ預け路を出し

限界の木に陽は差し相朴裏を走

墓清掃及て及ていし一 稲清じ

薔薇の前写真撮りおこなひ用

里曰猶曰異曰日曰涉曰

兼合の傾用の歴史

鎌倉の頼朝の墓草茂る

アヌノナルトに時折震へ大揚羽

夏空へ拳を突かむ仁王像

涼しさや鍛冶屋が研ぎし妻の出刃

◆水明インター ネット句会◆

令和六年七月

(8)

日盛りや林に籠る牛の群れ

湯上がりの越中ひとつ冷し酒

駄菓子屋は子らの社交場夏休み

雲の峰先導される自転車に

早朝の駅のホームに火蛾を掃く

まつりごと海霧(じり)に隠れる派閥かな

146

145

144

143

142

141